

## ギムナジウムの生徒としての哲学者

—ベルリン国立図書館に所蔵されるヘーゲルの青年時代の『日記帳』—

Eef Overgaauw  
尼 寺 義 弘 (訳)

本稿はドイツのベルリン国立図書館、手稿部門、部門長である Dr. E. オーヴァガアウヴェの手になる G. W. F. ヘーゲルの青年時代の日記帳についての論説の翻訳である。原文のタイトル、収録雑誌、刊行年などはつぎのとおりである。

Eef Overgaauw, Der Philosoph als Gymnasialschüler Hegels Jugendtagebuch in der Staatsbibliothek zu Berlin, in : Jahrbuch Preußischer Kulturbesitz, Band XXXVIII · 2001, Gebr. Mann Verlag.

翻訳にあたり訳者は2003年8月下旬、二度にわたり同国立図書館にて著者とこの論説について議論をする機会を得、若きヘーゲルについて知見を広げることができた。訳者はそのことに謝意を表するものである。

末尾の注は著者による原注と訳者によるそれである。原注は注の番号に〔原1〕というように記している。

翻訳および訳注にあたり“Meyers Grosses Taschen Lexikon”はじめ各種の辞典類を参照している。

歴史的な人物の、とりわけ現代史の人物の日記帳、回顧録および自伝は依然としてより広範な読者を得ています。聖アウグスティヌスの『告白録』<sup>1)</sup>、ジャン-ジャック・ルソーの『告白録』<sup>2)</sup> およびアンネ・フランクの日記帳<sup>3)</sup> は世界文学に属しています。とはいえたえばカサノーヴァ<sup>4)</sup> あるいはサン-シモン侯<sup>5)</sup> のような、非常に数少ない文筆家はその名声をもつばら、あるいは、圧倒的にその自伝的な作品

に負っています。過去10年間に現れたマルセル・ライヒ-ラニツキー<sup>6)</sup>、セバスティアン・ハフナー<sup>7)</sup> およびヴィクトール・クレンペル<sup>8)</sup> の伝記はとりわけ大部数が印刷され、販売されました。大ていの作家にあっては、我々はトーマス・マン<sup>9)</sup>、ゲルハルト・ハウプトマン<sup>10)</sup> あるいはステファン・ハイム<sup>11)</sup> のことをもつばら念頭におくのですが、伝記的な作品は著作全体のほんの一部をなすにすぎません。ゲルハルト・ハウプトマンにとって彼のメモ帳および日記帳は、彼の思想を秩序づけ、そして彼の文芸上の作品を構想するための不可欠の手段でした。彼は散歩のあいだつねに小型サイズのノートを身につけていました。そして大型サイズのノートはつねに彼の文机にありました<sup>12)</sup>。

何人かの重要な哲学者および神学者も伝記を書いています。そのなかで彼らは自分がどのようにして成長し、自分が何であるかを表現しています。ある程度の虚栄と自己を正当化する欲求が通常の場合それには属しています。アウグスティヌスは『告白録』のなかで、彼が虚栄心の強い、俗世の欲求に向かっていた若者から、どのようにして信心深い神学者に変わっていったのか、そしていかなる出来事や出会いが自己の人物と発達を刻みつけてきたのか、そのことを説明しています。英国の枢機卿ジョン・ヘンリー・ニューマン<sup>13)</sup> (1801—1890) は『自己の伝記の擁護』のなかで、神学者としての彼の成長の過程とカトリズムへの改宗について描写しています。『告白録』も『自己の伝記の擁護』

も、読者によって共に祈られうところの、神への祈りのように構想されています。バートランド・ラッセル<sup>14)</sup> (1872—1970) は種々の作品のなかで哲学者としての自己の発展を伝記的なおよび現代史の既成の事実と結びつける試みを行っています。

ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの日記帳、すなわちベルリン国立図書館が2000年の末に手に入れたこの手稿は、自伝的な作品としてはいずれの観点からみても例外をなすものです。それは思想家の成長の過程を描写しているのではなくて、個人的な体験を部分的にのみ描写しているのです。それは1785年から1787年のあいだに、ヘーゲルが15才から17才までのあいだに、彼がシュツウツガルトのギムナジウムに通っていたときに作られました。ヘーゲルは当時ギムナジウムの生徒であり、のちになることになる哲学者ではありませんでした。それゆえに彼の日記帳のメモのなか、彼ののちの作品の根本的な特徴を見つけ出そうとすることは誤った試みであるでしょう。彼の日記帳は哲学者のそれではなくて、ずいぶんとあとになってはじめて重要な思想家となるころの、ギムナジウムの生徒のそれであるのです<sup>15)</sup>。それにもかかわらずこの日記帳はヘーゲルその人を理解するために欠くことのできない源泉であるのです。

ヘーゲルは日記帳のなかで当時たいいの場合に彼に関心を抱かせた事柄について、彼の教養、読書およびギムナジウムの講義について、彼の教師との関係、さらに日常の細かな出来事について語っています<sup>16)</sup>。ヘーゲルという生徒はシュツウツガルトのギムナジウムの教育の範囲で読まなければならなかったギリシアおよびラテンの著者の作品ばかりではなくて、当時の必要な文献である教科書をずいぶんと凌駕した作品をも読書したのです。彼は故人となったギムナジウムの先生の遺産の本を買いさえたのです。彼はいくつかの箇所直接に彼の周囲

のちょっとした出来事について語っています。たとえば、「火のついた車の前から神の天使が飛んでいるのを」見たと思っている老婦人の迷信について語っています。それは実際には夜の旅で馬車を護衛する騎手のたいまつであったのです<sup>17)</sup>。ヘーゲルはこうした迷信について、さらにこの現象について問いただすことなしに面白がっています。これに対して彼は蜂起した農民が大公の城の窓ガラスを壊したことについて無条件に否定的に評価しています。

とはいえ注目すべきことに、年長少年の日記帳には、人が期待するであろうようなテーマのいくつかはヘーゲルにあっては全く述べられてはいないか、あるいは、ごくわずかにしか述べられてはいません。彼は家族についてはほとんど何も書いてはいません。もしも我々が他の資料から、彼の母がほんの少し前に死亡し、そして二人のきょうだいがいたということを知らなかったとするならば、日記帳からもそのことについて見聞することはなかったでしょう。ヘーゲルは父との関係については何も述べてはいません。彼の親族についてはその広い意味では(おじ、おば、従兄弟、姪)なるほどいくつかの箇所触れられてはいるのです。けれども、しかしそのことについてはさらに深く述べられてはいません。今日のギムナジウムの生徒の日記帳のなかに、人は女の子への一定のあるいは大きな関心さえも期待することでしょう、あるいは、少なくとも異性についてのいくつかの発言を期待することでしょう。ヘーゲルにはこのことはほとんど当てはまりません。それが語られているのは1787年1月1日のコンサートの参観についての一句だけなのです。“美しい女の子の眺めは我々の談話に役立つことが少なくありません”<sup>18)</sup>。

もしもこの日記帳が作者不詳として伝えられていたとするならば、今日の読者は15—17才の生徒の教養の水準、問題関心および精神世界について驚くことでしょう、というのはそれはす

でに作者不詳の日記帳として特別の意義をもつ伝記的な記録であるであろうからなのです。この日記帳はそれがのちに最も重要なドイツの哲学者に属することになる、その若い男のギムナジウムの時代に書かれたということが、この手稿を特別の文献としています。このことはヘーゲルがそれ以外の日記帳のメモをあとに残していないだけに一層よく当てはまることなのです。たぶん彼は公刊することを考慮して書かれたベルンのオーバーラントの散策についての物語りのほかには何の伝記的な著作も執筆してはいなかったのでしょうか。

なぜヘーゲルはこの日記帳を書いたのですか。彼の最も内奥の思想を紙片に打ち明けるためであったのですか、それはちがいます。彼の着想を大切にしておくためであったのですか、あるいは、それを良く整理しておくためであったのですか、それもちがっています。後世の人々に彼の青春時代を知らせるためであったのですか、それもちがっています。私には思われることなのですが、彼は日記帳を書き記すことを、思想の補充として、精神上の、言語上の訓練として見ていたのです。こうした観点からみてヘーゲルが、使った言語を変更している日記帳のその箇所は重要であるのです。最初に書き記されているのは、1785年6月26日に始められていて、ドイツ語で記入されています。けれども彼は1785年7月29日にラテン語に移っています。そしてただちに覚え書きの最初の行に、ラテン語の表現の仕方を練習するために、そしてラテン語の使用に一層大きな自信をもつために、言語の変更を行ったことを書き記しています。すなわち「ラテン語の表現の仕方を練習するために、そしてそれのより大きな力を得るために、ということが、なぜ私がこの歴史をラテン語で書こうとしているのか、ということの唯一の根拠であるのです。」<sup>19)</sup>

心理学者はかくしてこの表明についてつぎのことに注目し、そして推定することでしょう。

すなわちヘーゲルが示した動機は本来のあるいは唯一の動機ではありえないということ、そして他の、より深い動機が日記帳を書くために、あるいは、この日記帳を変更するために、この生徒の心を動かさねばならなかったということです。とはいっても我々はこの点について若きヘーゲルの言質を取りたいのです。しかし同時に彼が数ヶ月ののちにすでに、今度は何の理由づけもなしに、彼の日記帳の言語をもう一度変更しているということを強調したいのです。1786年3月22日より彼は話題としているテーマを変えることなしに、もはやラテン語で書くのではなくて、ドイツ語で書いています。日記を書きつける理由が一定期間のラテン語の練習にあったとしても、この動機は用いた言語の始まりについても、その新たな変更ののちのことについても決定的なものではありません。それはヘーゲルがギムナジウムで得たラテン語の知識を日記帳で練習することに喜びを感じていたということがあったかもしれません。理由のない言語の変更は、これが彼の覚え書きの唯一の根拠ではありえなかったということに対する証明をなすものです。

ベルリン国立図書館は、保管されているところのヘーゲルの遺稿のほとんどすべてのものを所有しています。ヘーゲルは1831年11月14日にベルリンで61才で死亡しました。ベルリンは彼が長きにわたり活動し、そこでは存命中にすでに大きな名声をえていました。彼の手稿はまず相続人の手にありました。トゥーハー一家の出であるマリー夫人と二人の息子、カールとイマヌエルの下に所持されてきました。哲学者の死後に開始されたヘーゲル全集の刊行がほぼ完成されたのちに、息子たちは彼の作品および講義の手稿を、彼宛に出された手紙も同じく、今日のベルリン国立図書館がそれから由来するところのベルリン王立図書館へ寄贈しました<sup>20)</sup>。こうしてヘーゲルの遺稿は今日の保管場所へ到達することとなったのです。



王立図書館およびそれを継承したこの図書館はヘーゲルの遺稿を補充していくことにつねに心を配ってきました。私的な個人の所有物から、古書店において、そして競売で個々の手紙類、講義の筆記録、著作の草稿およびその他のヘーゲルについての著作類が何度も何度も入手されたのです。ギムナジウムの時期の日記帳は——本来の遺稿が息子たちによって王立図書館へ寄贈されたとき——個人的な性格をもっている家族についてのその他の手稿とともに相続人が所有したままでした。それ以来この日記帳は代々受けつがれてきました。最後にそれはアメリカ合衆国に定住したヘーゲルの子孫の所有となりました。アメリカのこの所有者はありがたいことに日記帳を繰返し学問上の公刊のために自由に使用させてくれました。日記帳は1970年のシュトゥットガルトのヘーゲル-ハウスのヘーゲル展示会において特別出品として展示されました。すでに触れたヘーゲル全集の刊行のためにもこの相続人は日記帳を利用できるようにしました。

最後の私的なこの所有者は分かってはいない動機から日記帳を売却しようとしてしました。2000年11月29日にそれはロンドンのオークションハウス「クリスティーズ」で競売されました。プロイセン文化財・財団の委託により日記帳は英国の仲買人が国立図書館のために入手しました。各州の文化財団およびアルフリート・クルップ・フォン・ボーレン・ウント・ハルバッハ財団の太っ腹の、そして早急にかなえられた支援なしには、最高に重要なこの獲得は不可能なことであったでしょう。両財団にはここでもう一度彼らがコミットしてくれたことに対して心より厚く御礼申し上げます。

整理番号 Ms.germ.oct. 1376 によってヘーゲルの日記帳は今や興味をもつ読者には誰でも自由に利用することができます。

### 注

1) Aurelius Augustinus (354—430) ラテン教父。『告

白録』13巻(397—400)。

- 2) Jean-Jacques Rousseau (1712—78) 哲学者にして思想家。『告白録』(1765—70)。
- 3) Anne Frank (1929—45) が第二次大戦中アムステルダムの隠れ家で書き記した『日記』。
- 4) Giacomo Girolamo Casanova (1725—98) イタリアの作家にして冒険家。『わが生涯の物語(回想録)』(1791—98)。
- 5) Louis de Rouvroy Saint-Simon (1675—1755) フランスの作家、政治家。『回想録』(1694—1752)。
- 6) Marcel Reich-Ranicki (1920— ) ドイツの文芸評論家、エッセイスト。『我が生涯』(2001)。
- 7) Sebastian Haffner (1907—99) ドイツのジャーナリスト。『回想記 1914—1933』。
- 8) Victor Klemperer (1881—1960) ドイツのロマンス語学文学研究者。1933—45および1945—59の『日記帳』で著名である。
- 9) Thomas Mann (1875—1955) ドイツの小説家。
- 10) Gerhart Hauptmann (1862—1946) ドイツの劇作家。
- 11) Stefan Heym (1913—2001) ドイツのジャーナリスト、著述家。
- 12) [原1] G. ハウプトマンの遺稿は1968年にプロイセン文化財・財団によってこの作家の相続人から取得された。遺稿はそれ以来ベルリン国立図書館に保管されている。この遺稿についてはつぎの文献を参照すること。  
Rudolf Ziesche: *Der Manuskriptnachlass Gerhart Hauptmanns*. Teil 1: GHHs 1-230. Wiesbaden 1977 (Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz. Kataloge der Handschriftenabteilung. Hrsg. v. Tilo Brandis. Zweite Reihe: Nachlässe: Bd. 2, T1. 1), S. 9-28.
- 13) John Henry Newman (1801—90) イギリスの神学者、枢機卿。
- 14) Bertrand Arthur William Russell (1872—1970) イギリスの哲学者、数学者。『自伝』三巻(1967—69)がある。
- 15) [原2] ヘーゲルのこの日記帳については卓越した学問的な版が公刊されている。  
Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Frühe Schriften I*. Hrsg. v. Friedhelm Nicolini u. Gisela Schüler.

- Hamburg 1989 (Gesammelte Werke, Bd. 1), S. 1-33.
- 16) 〔原 3〕ヘーゲルのこの日記帳の内容について、より厳密な概観のためにはつぎの文献を参照すること。  
Walter Jaeschke, >Hegels Tagebuch<, in: *Georg Wilhelm Friedrich Hegel. Tagebuch aus der Schulzeit in Stuttgart (1785-1787)*. Hrsg. v. d. Kulturstiftung der Länder in Verbindung mit der Staatsbibliothek zu Berlin. Redaktion: Eef Overgaauw, Joachim Fischer u. Gabriele Wertmann. Berlin 2002 (Patrimonia, Bd. 214), S. 27-34 und die Abbildungen auf S. 23-25.
- 17) 〔原 4〕つぎの文献を参照すること。  
*Frühe Schriften I* (wie Anm. 2), S. 8-9.
- 18) 〔原 5〕Ebenda, S 31.
- 19) 〔原 6〕Ebenda, S 13.
- 20) 〔原 7〕Eva Ziesche, *Der handschriftliche Nachlass Georg Wilhelm Friedrich Hegels und die Hegel-Bestände der Staatsbibliothek zu Berlin Preußischer Kulturbesitz*. Wiesbaden 1995 (Staatsbibliothek zu Berlin - Preußischer Kulturbesitz. Kataloge der Handschriftenabteilung. Hrsg. v. Tilo Brandis. Zweite Reihe: Nachlässe, Band 4, Teile 1-2), S. 7-13; Eef Overgaauw: >Der Nachlass Hegel in der Staatsbibliothek zu Berlin - Preußischer Kulturbesitz<, in: *Georg Wilhelm Friedrich Hegel*, (wie Anm. 3), S. 11-18 und die Abbildungen auf S. 19-22.
- 21) Sonntags den 26 Juni.  
In der Morgenkirch predigte Herr Stifts-prediger Rieger, er verlaß die Augspurgische Confession, und zwar zuerst den Eingang in dieselbe; dann wurde gepredigt. Wenn ich auch sonst nichts behalten hätte, so wäre doch meine Historische Kenntniß vermert worden. Ich lernte nemlich, daß den 25 Juni 1530 die Augspurgische Confession überreicht wurde, daß Anno 1535 den 2ten Februar Wirtemberg reformirt wurde, und daß Anno 1599 durch den Prager Vertrag die evangelische Religion bestätigt wurde; den Namen Protestanten erhielten sie von der Protestation gegen den harten Reichsschluß zu Speier Anno 1529. Noch fällt mir ein daß Luther Anno 1546 den 18 Februar starb, und daß der Churfürst von Sachsen Johann der Weise, Anno 1547 den 24 April total geschlagen, und gefangen wurde.
- Monttags den 27 Juni.  
Noch keine Weltgeschichte hat mir besser gefallen als Schröks. Er vermeidet den Ekel der vilen Namen in einer Special-Historie, erzählt doch alle Hauptbegebenheiten, läßt aber klüglich die viele Könige, Kriege (wo oft ein paar 100 Mann sich herum balgten) u. a. dergl. ganz weg, und verbindet welches das vorzüglichste ist, das lehrreiche mit der Geschichte; ebenso führt er den Zu<sup>22)</sup>
- 22) G.W.F.Hegel: *Frühe Schriften I*, S.3.

(2003年11月13日受付)